

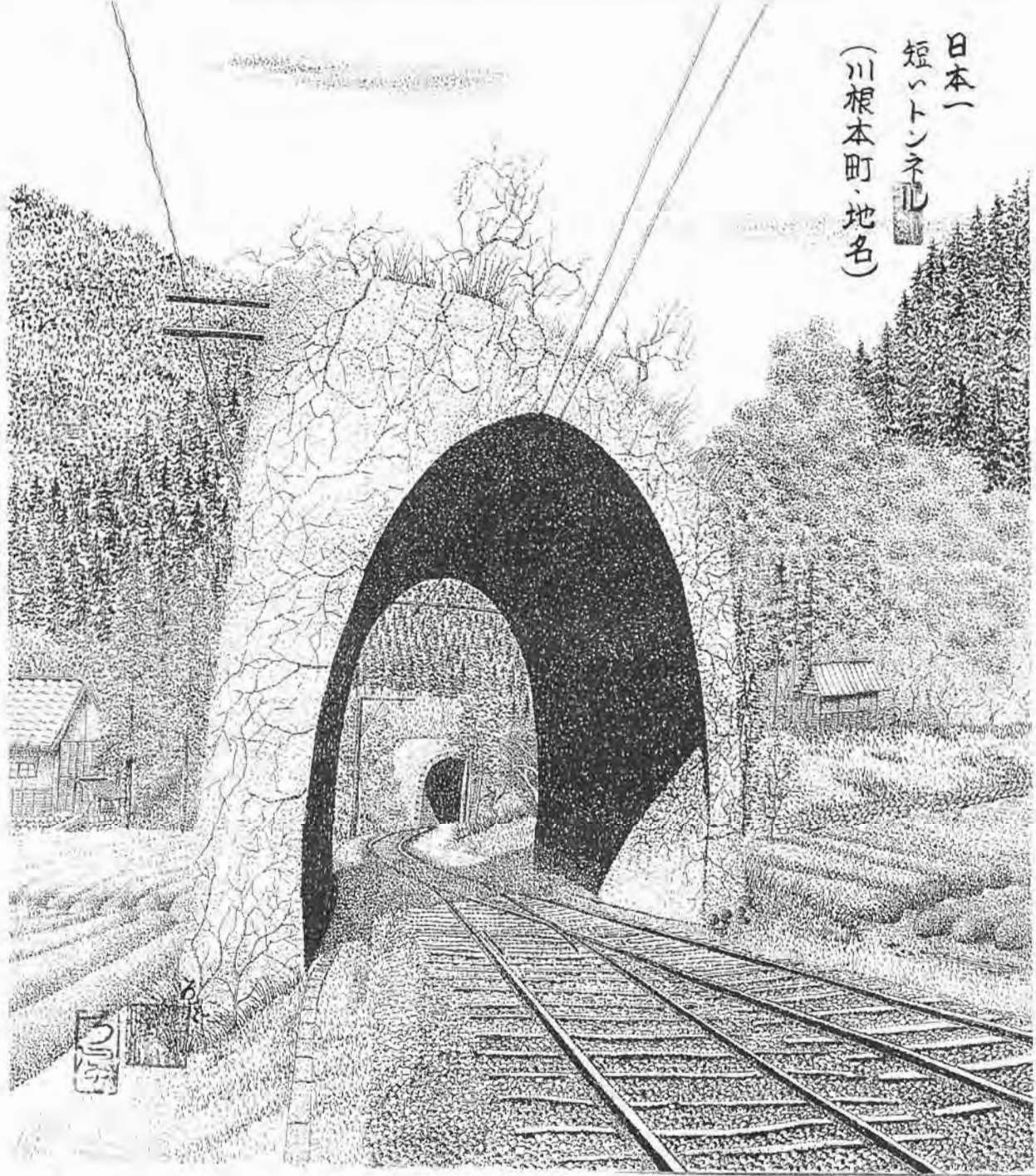
# 中川根ふる里通信

## = 第91号 =

中川根ふる里通信  
 昭和61年4月20日創刊  
 編集・発行・連絡先  
 静岡県榛原郡川根本町  
 TEL 0547 56-0047 上巻56-0049-6  
 56-0065 FAX 56-0020

<http://furusatotsushin.yamanoha.com/>

日本一  
 短トンネル  
 (川根本町・地名)



川根索道保安トンネルを、静岡市の荒波守夫さんが  
 点描画(=1mmより小さな全て点で描く絵) = 寄せてくれました。  
 3ページ目ご覧下さい。

二〇一一年三月十一日十四時四六分

### 東日本大震災「火災発生」

おさくなりになられた多くの皆様、哀悼の目請を捧げます。

被災された皆様、地域にお住いの会員の皆様、心よりお見舞い申し上げます。

日本歴史上、経験した事のない大災害が起ってしまいました。あの瞬間から数日間、日本中いや世界中に大地震の映像が報道された。ただ茫然とテレビの前にすわり込む日々が続きました。大津波の猛威、何もかも根こそぎぶちこわし、うたていく破壊力のものすごい。三分間も続いた激しいゆれ、強い震度の余震、恐怖の体験をされた皆様、言葉では言い表せませんが、心身の癒える日が必ず来ると信じましょう。

自然界の驚異と共に、現代社会の弱点をさらけ出したこの大震災、原子力発電所災害、石油コンビナート火災、燃料基地被災、地面液状化、送電線被害、中部地方で分断されている発電方法の違いなどが加わり、電気、化学燃料に依存した社会全体が大きな痛手を被ってしまい、災害地支援の手がおくれています。

安全、環境にやさしい原子力発電の神話は、いつまでも、いっさい、これより福島原発周辺は大地震も、川も、海も見えない核物質の侵入の為、生物の住めない場所になってしまいました。本当に残念です。

もし、この様な大地震が三十分前からの予想されている東海大地震が、ひる里静岡で起こることがあったら、予知ができています。予知が出来るなら、人命は最小限になると信じて、訓練をしています。予知が出来るなくても、身を守る方法は、考えておきましょう。

おめでとう、大村朱澄さん!! 早稲田大<sup>あひだ</sup>三年<sup>あひだ</sup>

広州アジア大会、銀・銅メダリスト

＝川根本町＝川根高校＝接峡湖が生んだ輝く星＝

★カヌー sprint 女子 カヤックペア (2人乗り) 500m、銀メダル

★カヌー sprint 女子 カヤックフォア (4人乗り) 500m、銅メダル

○小学2年で「船ひだん」カヌー競技の世界

今、日本を代表するトップアスリートに

アジア競技大会で、胸に輝く銀メダル・銅メダル!!

「皆さん、いつも応援ありがとうございます。大村朱澄です。

中国で開かれたアジア競技大会に出場しました。精いっぱい挑みましたが目標とする金メダルに届かず、くやしい思いをしました。

今後は、8月の世界選手権に向け、課題克服のための練習に励みます。世界選手権は、ロンドンオリンピック出場枠に大きな影響を与える大会です。力の限り挑戦します。」

昨年末、母校川根高校・川根本町に訪問され、在校生、多くの町民・佐藤町長らが快誉を込められた。



# 大井川流域 まちかど博物館

左の「まちかど博物館」ってご存知ですか？大井川鉄道沿線に、旧金谷町にハケ所、旧川根町にナケ所、旧中山根町にナケ所、旧本川根町にナケ所計四ヶ所の博物館が開かれています。実は、中川根ふる里通信も発信局として仲間入りしております。

身成(旧川根町)に、「いふく茶処やませき」という博物館があり、バスや東海車かともまる人気博物館になっています。そこにふる里通信を置かせていただいたところ、何人かの旅人が、ふる里通信発信局を訪ねて来るようになり、今回は荒波さんと柴田さんをご紹介します。

## 荒波守夫さん

表紙の「日本一短いトンネルを描いた方、何故訪ねて来て下さったのか」と言うのは、90号の地名発信所の写真を見て訪ねて来たとおっしゃった。おりしも「やませき」にて、点描画作品展も開催中だとおっしゃった。持ってきた点描画を見たとき、「これはすごいものだ」といふ「とびつくりした次第です。表紙の絵もどくとご覧下さい。トンネルの影の部分も一点一点と、うの、一筆一筆と言うか、影に当たるまで仕上げられたもの。



荒波さんが点描画を描いている様子。朝日新聞、静岡総局、グッドニュースサービス「人」より。

「川根地域には、絵になる風景が多いから好き」とおっしゃるので、「山や川や森や花の写真があるからあげましょうか」と話すと、「風景といっても人の香りや、建造物を描く」とおっしゃり、「温郷のフリ橋(くわき橋)」「蓬菜橋」を見せて下さった。それでは、以前ふる里通信の表紙につかった、地名の「日本一短いトンネル」をお見せしますと、気に入って下さり、「やってみます」とおっしゃり帰って行かれました。時は流れて、秋も終わりの頃、荒波さんが、訪ねて来られました。みごとに変身した「点描画」の作品を持って。

荒波さんは「点描画」の原点は、あの有名な山下清画伯のはり絵で作られた「打ち上げ花火」や「外国風景」に本会った事、「すごい」とやるなあ。鉛筆でその世界を再現してみたい」と思い立ち、筆ペンで点を打ち描いていく。独特の画法だとおっしゃる。見事な作品に譲ってほしいという声が続出し、注文に応じて製作しているとおっしゃる。又、読賣新聞「今月のしおり」に点描画が掲載されております。どうぞご覧下さい。

## 点描画

「ミリより小さな」  
全て点で描く絵

## 荒波守夫 (38歳)

〒41101 静岡県葵区新岡二六〇-二四  
TEL・FAX〇五四二七八-一四一一  
携帯〇九〇-二六八〇-一三三四八

## 柴田秀夫さん

柴田さんも「やませき」でふる里通信を見て訪ねて下さった方で、おりしも川根本町文化会館で会合中の私のもとへ、たずねて来られました。川根にゆかりのある方ですので、ご紹介致します。(この方も地名発信所のとりもつ縁です。)





柴田秀夫さん  
プロフェッショナル  
「ファミリータイム」

1940年静岡市生まれ。6才の時、静岡県榛原郡下川根村(現川根町)に転居。島田高校から静岡大学文学部経済学系卒業。静岡ガス株式会社に入社。定年まで勤めた。

著書に詩集「娘たちに」、写真集「一枚の写真」子どもたちの昨日・今日・明日「フォトエッセイ集」もしも人生が2度あれば」など。

現在中日新聞に「話題のシネマ」として毎週金曜日に新作映画の紹介欄を担当。写真関係ではSBS学苑写真教室の講師として、浜松と沼津に教室を持つ。その他に沼津市の「写真・燦」静岡市の「写悠三水会」で写真の講師をしている。平成18年・19年の2年間、月刊「厨房」にエッセイを連載した。現在静岡市葵区足久保口組に在住。

柴田さんの職業はフォトグラファーとされており、第二の人生を写真を中心に、エッセイ集、フォトコンテスト審査員などたくさんのは事をされてる多才な方です。

お父さんの職業が教師で、川根町の小学中学校の校歌を作詞された柴田秀三先生で、学童、学生時代を川根町で過ごされた川根をふるさととしておられる方です。そして「なわとび歌」を作詞した方です。

「なわとび歌」は皆さんご存知ですか？私(筆者)はよく知っています。今でもすぐに歌えます。懐かしい歌です。柴田さんにお逢いできたのもふるま通信を通じてのご縁です。のでしほし、六十年前の子供達の生活の中へタイムスリップしてみましよう。

エッセイ 柴田秀夫 作  
50年前の幻の童謡レコード  
「なわとび歌」を探し求めて  
より 抜粋

ひとつづつから始まって、とうとうで終わる「なわとび歌」という童謡がある。この歌は昭和二九(一九五四)年静岡県の教職員組合が、子どもたちの元氣よく楽しく歌える歌を新しく作り、普及させようと県内外から広く歌詞を募集し、最優秀として選考された作品。作曲は「みんの花咲く立」などで著名な作曲家

の海沼実さん。作詞は、今はとき私の父柴田秀三で、父はお茶の名産地として知られている静岡県の川根地区で、小中学校の教師をされていた。

絵や書ものなりの腕前で、授業でも教えていた。特に音楽の才能があったとみえ、ピアノ、フルートなどの楽器を演奏する傍ら、ゴッゴツと作詞・作曲も手掛けていた。父の作品が最優秀作品として採用されたのも、普段の努力の積み重ねが実を結んだ、ということだと思ふ。

「なわとび歌」が発表されたのは、私が中学三年生になったばかりの頃。朝の登校時間とか、昼休みには、いつも校庭にこの歌が流されていたから、私は自然にこの歌を覚えていった。ただ、歌っている明るい澄れとした声の女性歌手の名前は知らなかった。「誰だろう？どんな顔の少女だろう？」私はいっしょにその声に魅せられ、歌っている少女に憧れのようにな。ほのほの想いを寄せた。

「なわとび歌」が誕生してから五十年が過ぎようとしていた平成十六年の春、私は父の故郷・川根で「柴田秀三ゆかりの歌コンサート」を開くべく準備を進めていた。

私の最大の願いは、五十年前のレコードを発見することだった。何とかしてレコードを見つけ、集まってくれたみんなにも聴いてもらいたかった。私はコンサートに賛同、協力してくれた地元協力会員のひとりに、「何とかレコードを見つかる手助けをして欲しい」と懇願した。それから数日後、「レコードが見つかった」という嬉しい知らせが届いた。静岡市にお住まいの五十年前は二十代の青年、この「なわとび歌」は、フォークダンスを踊った青春の思い出のレコードだったと言う。

この方から届いたレコード盤と歌詞カードには、「川田孝子と伴久美子」という当時の人気童謡歌手二人の名前が書



「なわとび歌」のフォークダンス用振付説明書

「なわとび歌」の歌詞カードには、川田孝子さんと伴久美子さんの顔写真も載っていた

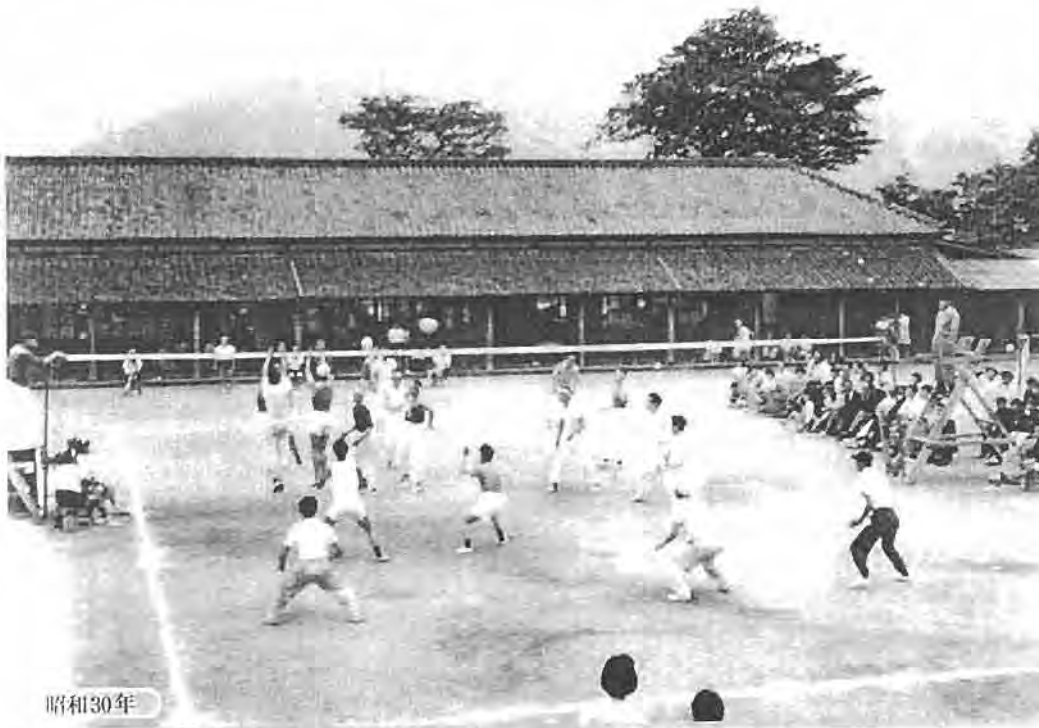


レコードはかわいい装丁の紙の袋に入れられていた

かれていた。カードには二人の顔写真も載っていた。少しセピア調になった写真の二人の顔は、私が中学三年生の時に想像していたとおりの愛くるしい笑顔の表情だった……。  
平成十六年六月二十六日、川根町民文化会館の会場は満員の盛況となった。あのレコードから二人の童謡歌手の歌声が流れ、会場を魅了していった。

「なわとび歌」 作詞 柴田秀二 作曲 海沼 実

- 一、ひとつひばりは雲の上、雲の上  
ひろい茶畑 麦畑 麦畑  
ふたつ 富士山の晴れ次女  
風呂水 汲みまし。跳釣瓶はねつるべ
- 二、みつみかんの花さかり花さかり  
みつほちくまはち飛んでいけとんでいけ  
よつよい子のお手つだい  
よいお茶つみまし。はこびまし。
- 三、いつついつもの原っぱへ原っぱへ  
いきまし。まりつきボール投げボール投げ  
むつ昔の子守歌  
胸にだいてるおかあさん おかあさん
- 四、ななつ菜の花 桃の花 桃の花  
ならんだ向こうの青い海 青い海  
やつやまほと 青いはと  
山のはたけのとうがらし とうがらし



昭和30年

五、ここはつ、こつ、そり、こおろぎが、こおろぎが、ころころはいてる。土間のすみ土間のすみ、とうでとうさん お帰えんなさい  
とろとろ、いろりの火が赤い火が赤い  
※どうですか？歌える方が多いと思います。一番から続く。二つ重ねの言葉、ちやんと訳があるのですよ。私は、運動会で踊りましたので、当時が目に浮かびます。フォークダンスでもあったのですね。

思い出のアルバムより、川根中学校、一職員球技大会—  
川根中学校は象山の山の手にあり、運動場はせまかった。  
柴田さんも柴田秀二先生もご存知と思います。写真は、昭和33年ころ、手前チームの前衛センターは恩師川井先生、懐しい先生方が……

「せいくらへ」について

一、静岡市 石塚 幸男

一、柱のきずは おとしの

五月五日のせいくらへ

ちまきたべたべにいさんが

はかってくれたせいのため

きのうくらべりや なんのこと

やっとはおりの ひものだけ

二、柱にもたれりや すぐ見える

遠いお山も せいくらへ

雲の上まで 顔だして

てんでに せのびしていても

雪のぼうしを ぬいでさえ

一は やっばり 富士の山

だれの胸にもじーんとくる童謡である。作詞は海野厚、作曲は中山晋平。

この歌碑が、静岡市立西豊田小学校の校地内にある。と言ったら驚く人もいるだろう。それもそのはず、海野厚は本校の卒業生なのだ。また、達筆の字はやはり本校出身の書家西河実。歌碑の裏に、「学校創立八十五周年、開校十五周年記念、昭和三十六年十一月四日、市立西豊田小学校児童会」とある。詩碑のそばに「せいくらへ」の碑について」という題で由来を説明した木の看板がある。それには、

「せいくらへ」の歌は、海野厚さんが作った童謡です。海野厚さんの本名は「海野厚一」といいます。明治二

十九年(一八九八年)に曲金まりのねで生まれ幼児期から少年期をこの曲金で過ごし、私たちの学校を明治四十二年に卒業しました。

厚さんは「せいくらへ」の他にも『おもちゃのマーチ』など私たちがよく知っている童謡をたくさん作りました。また、俳句、詩、随筆、小説などの作品も数多く残しましたが、病気の為二十八歳(一九二五年)の若さで亡くなりました」という説明がしてある。

二、

一番の歌詞を考えると、二つの疑問が生じてくる。「なぜ、おとし」なのか、海野厚は七人兄弟の長男(弟三人・妹三人)なのに「なぜ、いさんがはかってくれた」のかである。これを解く鍵は、彼の経歴と家族構成にある。海野厚は、静岡県安倍郡豊田村曲金(現在の静岡市駿河区曲金)に生まれた。生家は江戸時代初期よりあり、父伊三郎で十一代目という旧家であった。

彼は豊田村立尋常小学校(今の西豊田小)を卒業すると、旧制静岡中学校(今の静岡高)に進んだ。大正四年、静岡中を卒業した厚は三高(今の京都大学)の受験に失敗し、早稲田大学文学部に入学した。

大学時代の彼は俳句から詩、戯曲、小説へと多彩な文才ぶりを発揮している。

さて、先に厚は七人兄弟の長男であると書いた。その末弟の十七歳も年下の春樹氏(故人大阪芸術大学教授)を、厚はもつとも可愛がっていたという。春樹氏は、「せいくらへ」について次のように述懐して、「この歌は日本の風景を一般的に描いたものではありません。兄が弟の私を、気持ちに成り代わって作ってくれた具体的な歌なのです」

(ニ) 二〇〇二年ころ? 『読売新聞』以下の諸引用・解説は同紙を基にする)と言っている。

そしてそれを解く鍵として、「おととし」がまず挙げられる。厚は十九歳で上京しているが、「おととし」としたのは、作詞当時、二年間帰郷できなかった、というところが考えられる。

童謡『せいくらべ』は大正八年、東京日々新聞(毎日新聞の前身)の募集に応じて、入選した作品である。選者は薄田訖(たか)であった。当時、児童文学の確立に懸命だった鈴木三重吉の『赤い鳥』に加わり、童謡詩に熱中していった。この頃厚は不治の病とされた肺結核におかされていた。実際一九一九年を最後として帰郷していない。病身を抱えての創作活動は帰郷する余裕がなかったのだらう。

作詞したと思われる、二ニから二三年、厚は東京で「静岡に住む弟は、この二年間でどれだけ大きくなったらう?」  
と思いやつたのであらう。

春樹氏も「末弟の私は小学三、四年生で、ちょうど羽織の紐が気になる年ごろだった。そして、その年齢の子供が二年で伸びる身長が、まさに羽織の紐の長さと同じである」と言っている。

十九歳で上京した厚にとって、十七歳年下の春樹は特別な弟だった。共に暮らす期間が短く、その成長を時折の帰郷で確認していた。それだけに二年も帰郷できなかったことが、「弟も寂しがつているだらう」という気持ちと重なって、それが「せいくらべ」に色濃く反映されたのであらう。こうしてみてみると、「おととし」や「にいさん」の謎も一挙に解けるのである。

そしてまた、海野厚のこういう優しい人柄ゆえに、ロサさむと自然と顔がほころぶ『おもちゃのマーチ』『ひなま

フリ』『天の川』『七色鉛筆』『山の学校』『月夜の畑』  
郵便局』などの数々の傑作が生み出されたのであらう。

## 三.

『せいくらべ』には、もうひとつ触れておかなければならない大切なことがある。

それは、二番の歌詞のことである。『せいくらべ』は作曲者の中山晋平に渡されたのは一番の歌詞であった。作曲後、レコード化するに当たって短すぎるため、晋平のたっての希望で、二番の歌詞が作られたのである。その完成は三年後である。静岡生まれ静岡育ちの厚は、朝な夕な眺めた富士山をテーマに、ひと晩で書き上げた。ただメロディーが先にあるので、かなり苦心したと伝えられている。なるほど二番の歌詞がすべて七・五の繰り返りになっているのに、二番は一部、「柱にもたれりや、すぐ見える」の「八・五」となっていたり、「てんでにせのびーしていても」の「四・八」となっていたりする箇所が見受けられる。

これには歌曲の表現法に厳しい晋平も、さぞかしびびくりにしたことだらう。よくのKサインを出したものである。

厚自身気になっていたとみえ、「場合によっては一節の歌だけで十分だと思えます」(『せいくらべ』所収の「子供達の歌第三集」の自注)と言っている。

いま西豊田小学校あたりからは、歌詞と同じく、富士山とせいくらべしているような竜爪山などの山々が望みされる。だが、富士山には敵うべくもない。「はやっぱり富士の山」なのである。

以前にも万葉歌人に富士山を詠んだ名歌があり、また正岡子規に、

## 万国の博覧会にもち出せば

## 一等賞を取らん不尽山

という歌があるが、「日本の富士山」という表現が定着したのは、この童謡が広く歌われるようになってからだ、と言われている。

## 四

拙文をしたためるべく、私は二〇一〇年九月二日（静岡市が日本で二番目の暑さ三六・二度を記録した日）すでに数回、曾祖父の西豊田小学校の教頭森みゆき先生を訪ねた。

同校の児童は、「せいくらへ」のいろいろを知っており、誇りに思っていること、児童集会を「せいくらへ」集会、秋の文化祭を「せいくらへ」祭り」とそれぞれ呼んでいるし、また五月五日には、地域やその他の人々が、歌碑の前で「せいくらへコンサート」を開いている、などなど有意義なお話をうかがった。とても嬉しかった。

じつは、悲しいこともある。私が授業で接した、ここ数年の高校生たちは、ほとんど「せいくらへ」を知らないのだ。やむをえず、歌ってみせると、バラバラと義理拍するのむいたが、大方はキョトンとしている。こんなに郷愁をそそぐいい歌なのに、とカんでみせるのだが、反応が鈍い。歌詞の「ちまき」は「はおりのひも」は分からないだろうが、メロディはどうだ、と訊いてみても、いまいちこちらが望む答えが返ってこない。

「じゃ帰宅したら、お母さん、お父さんに訊いてごらん」。その答えがはかばかしくない。知っている、と答えた父兄が少くないというのだ。だいたい団塊の世代の十歳ほど若い年齢層だから、そうかなあ、としぶしぶ納得せざる

をえない。

それでも懲りずに、生徒の前で「山田の中の一本足の  
案山子」の『案山子』、「村の鎮守の神様の……」の『  
村祭り』、「しほしもやまずに槌うつびびき……」の『村の  
鍛冶屋』、「あした浜辺をさまよえは……」の『浜辺の歌』  
を歌ってみるが、ほとんど、「フーン！なにぞれ？」という  
表情で聞いている。

ちなみにいまどきの高校生にとって『案山子』の「山田  
鍛冶」の言葉、「村の鍛冶屋」の「鍛冶屋」「ふいこ」「鍛  
冶」の言葉、あるいは『村祭り』の「鎮守」「豊年満作」な  
どという言葉はもう死語となりつつあることを実感して  
いる。また『浜辺の歌』の「あした」は「明日」と勘違  
いされそうである。

この現象は、歌の伝承が行われていないのが主たる原  
因であろうが、もうひとつ、読書量の減少化が原因となろ  
う。いま書店に並んでいる本をバラバラとめくっても、これ  
らの言葉は意外と散見されるのだ。読書量の不足は、  
語彙力不足の他に、総合的な思考力不足をきたしている  
ことはすでに先年発表された国際学力テストで実証  
され、特に読解力の沈降ぶりを嘆いたことであった。

こんなこともあった。清水地区の某高校で、「名も知ら  
ぬ遠き島より流れ寄る椰子の実ひとつ……」と口ずさ  
んだら、聞いたことがあつた、ある、と活発な声があがった。  
折しも、清水区役所から、このメロディーが流れてきた。正  
午を知らせるチャイムである。その時の生徒の複雑な  
表情が見物だった。

すかさず私は「聞いたことがあるはずだ。君たちは毎  
日弁当はまだか、な」と思いつきから聞いているんだもの



といやむと言ってしまったのだ。ベテラン教師？らしくらぬ態度ではある。といまは、ちよっとばかり反省している。

ちなみに、清水地区では、なせ正午に『椰子の実』のメロディを流すのか、区役所、市教育委員会など関係諸機関に問い合せたら、ほかはかしい答えが返ってこなかった。おそらく椰子の実が遠い島から流れつくように「港」大勢の人が集まってくる」という連想ではないか。しひとしたことは、私にはまだ分からない。

しかしながら、あの『荒城の月』さえ音楽の教科書から消え去っている時代だ。なんだかんだと言っても、日本人のDNAに深く植えつけられている心を揺さぶる名曲の教数を風化させてはいけないと思うが、読者諸氏はいかが思うだろうか。

やや筆がそれたが、本題に帰ろう。海野厚の生家はいまや思く、静岡市南幹線(カネボウ通り)沿いにある和菓子店「松相堂本店」の一角に「海野厚生誕の跡」の立派な石碑がある。聞けば、「松相堂」のご主人が、海野厚の生家が、そして『せいくらべ』が、人々から忘れられないようにとの思いから建てた、とのこと。その深い思いにはいたく感動した次第であった。

西豊田小学校隣接の「曹洞宗法蔵寺」の墓地に海野家の墓がある。『海野家之墓』と刻した墓の左右に分かれて『童謡詩人海野厚碑』と、北原白秋が激賞した、

『天の川』  
白い鳥 白い鳥  
白い鳥 二つ  
天の川 わたれ



西豊田小学校、校内にある歌碑、看板の全景



わたった わたった  
仲よく わたった  
の詩が刻んである石碑が立っている。  
天折の詩人海野厚は、ご自身愛してやまぬ童謡の教々が、人々から忘れ去られていくこの時代を、どんな思いでみているのだろうか。  
―― 終

本文に関する写真特集  
石塚さん撮影



法蔵寺正面



歌碑 石碑の刻字



海野家の墓



木の看板

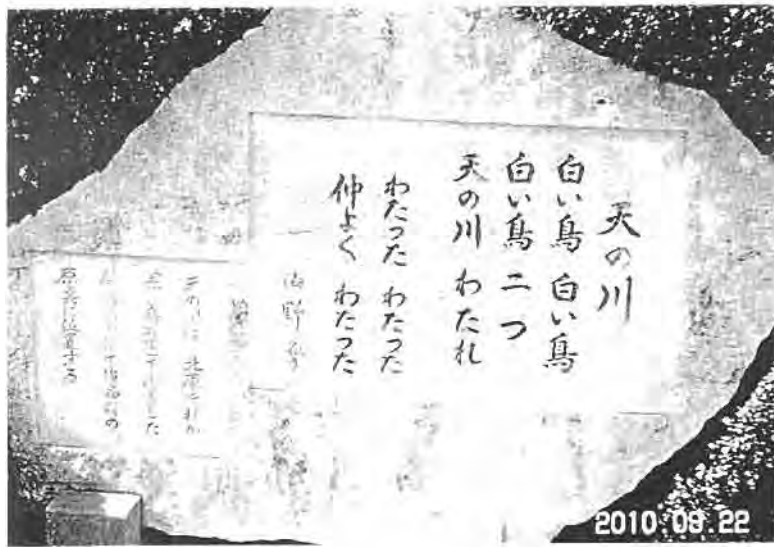


「海野厚生誕の地」の石碑



松柏堂全景

まん中に石碑がある。



海野家の墓の向かって左にある天の川の碑



海野家の墓と向かって右にある海野厚碑



### 友への書簡

川根本町 細田洋司

A君お元気ですか。世の中、相変わらず話題が多いようですが、私の住んでいる山麓の町には、静かな時が流れております。

最近、学生の頃に読んだ本などを出して、昔を懐しみながらページを繰っております。

その中の一文。

「黙っていることは決して美德ではありません。……結局、安静と平安を願う人は、二十世紀に生まれてくるべきではなかったのです。……」

A君も読まれたこと、あると思いますが、これは小説「あゝ野麦峠」(映画にもなりましたね)の著者である山本茂実さんの処女出版本「嵐の中の人生論」の巻頭に記された文章です。

当時高校生であった私は、つまり、五十数年前ということ、とにはなりますか)仲間であった、O君、G君、I君、そして、ひと足早く鬼籍に入ってしまったS君などと、「沈黙は金なり」という、古来からの格言を真向うから否定した。この文章に出会いとても驚いたものです。

別の言い方をすれば、強烈な「カルチャーショック」を受けた、ということでもあります。

それ以来、こんにちまで、ペンを持つたびに、このことばを憶い出し、同時に、この発想に驚き、そして、これについて、何度も何度も語り合った当時の仲間たちのおもかげが、いつも脳裏に鮮やかに蘇ってきます。

私は山本茂実さんのこの言葉から、文章を書く際に際して持つべき基本的な姿勢を教えられたのだと今も思っております。

とはいっても、あまり立派な文章は書けません。でもこの生きた「証」、考えた「証」として、つたない文章ではあるけれど、形として残して置くことにしよう……。A君、私はこの年になって、そんなことを大真面目で考えているのです。

ところでこのころ沖繩に関わる話題(政治的な面での)が多かったようですね。

一つはアメリカ軍への軍事基地の場所選定の問題、もうひとつは、昭和四七年五月一五日の沖繩返還(アメリカから日本領となること)の時交された、日米間の協議事項の内容をめぐる問題です。

今回はその中で、沖繩返還に関わることについて、当時の憶い出しながら記してみたいと思います。

これについては、既に新聞やテレビ等で一部始終が報じられておりますので、簡潔に記すことに致しますが、最も気になることは、このような重大なことが「密約」として、長い年月、保全(又は放置)というべきでしょうか)されてきたということですね。

「密約」は大別して二つに分けられます。

ひとつは「核密約」であり、もうひとつは、沖繩返還に際しての「財政密約」です。

前者は、核兵器を積んだアメリカ軍の飛行機や軍艦が、日本へ進入(寄航など)することは自由であり、その都度、日本政府の許可を受ける必要はない、というもので、これは

昭和三五年、日米安保条約の再締結の時に、アメリカから日本政府に、文書の形で通告された、とのことですね。

従って、この「核密約」は、正確に云えば、沖繩返還以前の密約であり、返還後の沖繩に対しては、核持ち込みは、従前通り、フリーパスであったということなのです。

つまり、日本政府が、内外に示した「非核三原則」の一つは、この時から破られていた、ということでもあります。

今ひとつは、沖繩返還に伴ない、アメリカ側が負担するべき、沖繩の土地の現状回復費四百万ドルを日本が肩代りをする、という「財政上の密約」のことです。

これについては、元毎日新聞記者の西山太吉さんが外務省の機密公電をスクープしたのですが、時の政府は、外務省の女性事務官との「男女のスキヤンダル」にすり替え、この真相を隠ぺいしてしまいました。

これが、平成二二年三月十九日、三八年もの時を経て、これが紛れもなく「密約」であったということが、国会の場で明らかにされました。

この西山さんの事件については、当時の週刊誌が、興味本位的な記事にして大きく取上げ、また、新聞やテレビなどでも、たびたび報道されたものです。

今思いますに、この時の「国」は、「密約」の存在を隠すために、必死で、マスコミに働きかけをしたのではないのでしょうか。

三八年もの間、ぬれぎぬを着せられてきた西山さんの心中はいかばかりであったか、察するに余りがありますね。

古くからのことばに

「民は扱らしむべし、知らしむべからず」という文句があります。民は従うもの、又は従わせるものであり、その民に対して「官」がいろいろと知らせる(説明する)必要はない

ということですが、「上は官」「下は民」という、「官尊民卑」の考え方と表裏をなすものといえまじょう。

前の書簡でも記しましたが、司馬遼太郎さんは、その著書「昭和という国家」の中で、

「どうも日本は非常に秘密主義の国でして、特に、昭和前期の日本というものは、本当に秘密主義でした。悲しいことに日本はそういう国だった。なぜそうだったのか、弱みを隠し続けたからであります。」

と述べておられますが、今回の一連の「密約」の内容とその経緯を振り返ってみますと、この「国」の秘密主義というものは、「昭和前期」ではなく「昭和全期間」と「平成」の世まで続いてきた、ということになります。

いふなれば、この「国」の体質は、戦争に敗けても少しも変わることもなかったのだ、といえるのではないのでしょうか。まことに残念なことだと思います。

「佐藤総理、沖繩返還に、核抜きを強く主張。柴ちゃんと呼ばれたいぐなど、やにさがってはいないで、へやにさがるハルハル気分になってニヤニヤすること」本気でやってもういたいです。」

(昭和四四年九月号)

「核抜き・本土なみ・七二年(昭和四七年)返還・マスコミのこの震々しいうたい文句。はたして沖繩返還は、佐藤首相のいう通り、世紀の大事業であったのだろうか。」

昨年(昭和四四年)十一月三日、ワシントンで、佐藤・ニクソン会談がまとまった夜、沖繩で「日の丸」をかかげたのは、自民党本部だけであつたという。

しかも、現地沖繩の祖国復帰協議会は解散せずに、復帰運動を安保条約の廃棄と結びつけて、いっそう強力にした

たかう方針を明らかにしたという。これは事実である。」

(昭和四五年二月号)

「一年をふり返って感動的なできごととは、というとさすがの骨が折れる……。」

佐藤総理のノーベル平和賞受賞、これは別の意味で感嘆した。高速道路に白昼、おぼけが出たような、意外性に通ずるものがあるからである。マスコミもさすがに、丸がひけたのが、取り上げるのをすぐやめたようである……。」

(昭和四九年十二月号)

三つの文は(印)、いずれも、私が農協の広報紙の編集後記「やぶにらみ寸評」に記したものの一部です。

四十年ほど前に書いたものですが、「核抜き、本土なみ」を連発する当時の佐藤総理に大きな疑念を抱いて書いた記憶があります。

とくに最後のものは沖繩返還交渉締結後四年目のできごとになります。この人がどうしてノーベル平和賞を受けるのか、という思いが強くありまして、そのため、少々皮肉めいた表現をしてしまいました。

今になって思いますと、全く的外れでもなかったようですね。

A君、こんな文を書いた時代もありましたよ。

「密約」のとりきめをした人物が、ノーベル平和賞の受賞対象者に選ばれた、という不可解な事実。

世の中、ワカラナイことが多い、といわれますが、その中でも、これは、納得できないことの上位にランクされることからは、ないでしょうか。

昔の駄文まで持ち出して申訳ありませんでした。今にして思うことは、これら一連の事柄(事件)ともいなりべきでしようか)を通して、私たちが心にとめておきたいことは、「国」は「民」に対してどのような姿勢をとっているのか、ということと常に忘れないことである、と思いますね。

それと同時に、過ちを正そう、改めよう、という姿勢があるか否かを見きわめるといふこととあります。

一つ一つの事柄をとり上げて、そのことを糾明するだけでなく(それもまた大切なことではあります)、民に対しての根本的な姿勢を糺す、ということがなされなければ、この国の未来は拓けないのではないかと……。

いささか生意気な言辞ではあります。『密約』の内容とその経緯を前にして、今は、そんなことを思っております。

末筆となりましたが、去る四月に、作家の井上ひさしさんが亡くなられました。

私より二歳、年上になります。

井上さんは「憲法第九条を守る会」の結成呼びかけ人のひとりでもあり、私の最も尊敬する作家の一人でした。

とても残念に思っております。と同時に、命は限りあるもの、ということも改めて感じさせられました。

少し長くなりました。では失礼します。

(註)今回の「密約」の内容等については、朝日新聞の記事を参考にしました。

— 平成二十二年五月 —

平成二十二年七月三十日発行

『川根文芸』第九十一号投稿文より

昨年末、細田さんより「反への書簡・追伸その六」が届きました。そこには編集者へのメッセージも添えられています。その中より少しお届けします。

——この「反への書簡」は通算で十七通目となります。第一回は平成十三年十二月で、十回になったところでやめるつもりでしたが、「想い」がいろいろ湧いてきまして、「追伸」の形で記したものです。全て『川根文芸』誌へ投稿しきょうに、こゝまで。

それから四十年の月日が流れ、立派な茶園となりました。



【想い出のアルバムより】高郷 巖山 スケン開拓、昭和44年ごろ撮影者 中村藤雄さん(小中) しかも、中村さんは同級生。そして、私は、スケンの南山中腹に、生家があり、一軒家、年のはじめに、兄弟と父母の山家暮らし。児童図書館の「山のいのち」夢さながら、そして、すぐ上の兄弟ちゃん、細田さんのお友達、同級生也、年々をこえた友達がたくさん遊びに来ていました。柿栗、柿と食べものはありました。

10数年前に、静岡新聞社より「庶民写真館」が発行され、県内各地の昭和12年頃～40年代まで、懐かしい写真が220ページに渡り載っており、追憶が甦ってまいります。その中に、ありました、川根本町が——。だった一枚。

東京のかたすみから(五九)

テレビの始めから終わりまで

プロの小指一本

渡邊 實夫

大相撲の初場所中、新年早々の一月十六日末明、朝青  
竜が六本木のクラブ前で、車に乗せた知人の男性に怪我を  
させるという傷害事件を起こした。警視庁は現役横綱が  
一般人に暴行し、約一ヶ月の鼻骨骨折の重傷を負わせ、こ  
とを重くみて、東京地検に処分を委任したと報じられた。

暴力事件ではないが、私も五十数年前、プロの体力、小指  
一本でもすこいものだと、身をもつて教えられ、味わって  
いたことを思い出した。

NET(現在のテレビ朝日)が開局して間もなく、昭和三十  
五年の秋、みんな仕事にも慣れて来たころのことである。  
その中に、東洋フライ級チャンピオン、ボクサー三迫さんがい  
ることを知る。彼は映画部に所属し、洋画フィルムの放送  
担当のディレクターで、フィルム本編に「日本語の字幕テロッ  
プをスルーしたり、コマリシャルを入れたりする」キマー出  
し指示をする仕事をしていた。私はその指示に従って時  
計を見ながら映像、音声を切り替えるスイッチャーで、  
三迫ディレクターのキュー出しに従い横に座っていた。  
本編に入り、フィルムを流しておくだけでよいので一休み  
している時(枕中閑)のこと。

私はなにを考えたか「ミサコさん、相手がノックアウト  
する程、ボクサーの手は強いのですか」と訊ねたとき  
のことである。

彼の小指が私の鼻先に一瞬触ったと感した、その時、  
私はボクサーとなり、数秒意識を失った。

気が付いたとき、彼は「こんなものだよ」と言わんばかりの  
ニヤリとした笑顔で、私に視線を注いでいた。

私はこの「ミサコさんの小指一本で意識を失う」という  
魔の初体験をしたのである。勿論、局内の誰にも話すこ  
ともなく、そのまま三十数年後定年を迎える。

彼はその後退社して三迫ジムを設立、多くのチャンピオ  
ンを輩出して、全日本ボクシング協会会長に就任した。  
彼は勿論、当時の「小指のお遊び」アドバイスは忘れて  
いることと思う。私に鍛え上げたプロボクサーの小指一本の威  
力を教えてくれたのである。

更に彼の名誉のため、インターネットのホームページ「三迫  
ボクシングジム」を紹介する。



はじめまして、三迫ボクシングジム会長の三迫仁志  
です。現役時代は東洋太平洋フライ級のチャンピオン  
までになりました。明治大学2年生  
の時です。世界タイトルのチャンスが  
なく現役を引退。昭和36年に  
三迫ジム設立。自分の夢を選手に掛け  
世界チャンピオンを3人輩出した。  
輪島功一、三原正、友利正、現在4  
人目の世界チャンピオン育成に力を注  
いでおります。どうぞ皆様、ご支援  
ご声援をよろしくお願い致します。

—プロフィール 三迫仁志(みさこひとし)—

- 1934年1月10日 愛媛県新居浜市にて誕生。
- 1946年4月 県有名校西條中学入学。  
同級生に元巨人軍監督藤田元司氏。
- 1950年5月 野口ジムの先代会長、ライオン野口氏にスカ  
ウトされ上京、明治大学付属明治高校編入。  
プロデビュー。
- 1950年11月 明治大学商学部入学。
- 1952年4月 日本フライ級チャンピオン、学生チャンピオンは初。
- 1955年1月 東洋フライ級チャンピオン
- 1955年3月 引退。世界タイトル挑戦に夢を掛けたが、  
チャンピオン側に受け入れてもらえず、野口会長  
共々引退。(—テレビ朝日入社—)
- 1958年(33歳) 三迫ジム設立。
- 1960年12月 (株)三迫プロモーション設立。以下、
- 1962年 世界ジュニアミドル級チャンピオン、1975年輪島功一、1981年  
三原正、フライ級チャンピオン1982年友利正を輩出。プロ

当時の職場には、プロレスでオリンピック帰りの永里さん、柔道学生チャンピオン、テニスの宮城一家の玲子さん、他体育会系出身者などスポーツ界で有名な若者がワンサといた。スポーツ番組を編成放送するとき、彼等の顔で出演・制作の交渉がスムーズに行え、スポンサーも付きやすく、視聴率もとれよく表れ、万事うまくいったのである。

三迫さんはボクサーチャンピオンとして入社した貴重な存在で、映画番組も兼務し、有能な放送ディレクターとして黎明期のテレビ界に貢献した。

最近話題の相撲界と暴ク国の癒着問題や、野球賭博などの非社会的な低次元な事件ではなく、重ねて彼の人権人格を尊重して書かせていただいたことを付記する。

編集室より

二〇一〇年 九月 記

寄稿五九回の渡邊さん、発刊のご支援もいただき、並々ならぬご協力を感謝申し上げます。特にテレビ局報道の仕事もなさっておられた事から、テレビの始めから終わりまで「のテーマは、あ、そうだったのか」と知らない事が多く、広く読者の皆さんから共感をいただいたてまいました。

その渡邊さん、お正月に脳梗塞でたおれられ、入院、手術、けんめいのリハビリ中など、お伺い致しました。充分養生されて、又寄稿して下さいることをお待ちしております。

さて、お手元にバックナンバーがある方は、90号の「耳と旋律で世界制覇」の大賀さん(新聞にて四月二十三日死去)、99号「地デジ始まる」86号「東京タワーの話その二」そして88号の「周波数の壁・東西分断」―分国国家日本・五口ヘルツ、六口ヘルツ余談―など、まさに「この時」の時代にマッチした寄稿です。今一度お読みいただ

れは嬉しいです。

シリーズ 川根の水車探究 その三

水川の水車について

水川地区は、昔村境を決める時、朝の〇時に〇場所を突いて出会った所を境とする。健康を遂手に立てたよう、上長尾村境は、かなり接近しています。特に、山岳方面は、長尾川を渡って攻め入っており、当時の権力の大きかった事も、考えられます。今回、本村・尾呂久保・長野地区に分けて、載せてみました。

一、水川(本村)について 鈴木 貢さんに聞く

水車の起源はいつかはわからないが、大井川に流れ込む小川に水車はありました。村の南側から、すけだいら沢、鯉沢、橋詰め沢、平溝沢の四箇所で、水川川から直接水車を利用した話は聞いておりません。

すけだいら沢と鯉沢の水車は昭和五六年頃まで穀物を搗くように稼働していました。

橋詰めの水車は大正末頃に廃止しました。

平溝沢の水車は、昭和のはじめ頃には二箇所あり、一つは昭和三十三年まで穀物を搗く以外に、お茶の機械を動かしていた。

昭和の初めまでは水車全部が木製でしたが、その後水車も受ける部分だけはトタン製になり、水車自体が軽くなって動力の効率が良くなりました。又、いつの頃からかは判りませんが、平溝沢の水車に、木製の八角の太い心棒の両端に、鉄の心棒を埋め込み、当時としては珍しい「ボールベアリング」を



取り付け、より効率の良いようにして、製茶機械を動かしていた。ベルトを取り付けるにも、木の心棒にやはり木製の「かわねぐるま」を作りつけて動力にしていた。

つい最近まで水を受け取る部分のトタン製の残骸があった。それから見るに水車の大きさは、直径が九尺(27m)ぐらい、幅は一尺五寸(45cm)ぐらい、一回転で二度杵を搗くように心棒に角材を取り付け、水車によっては臼が二つ同時に搗ける所もあった。

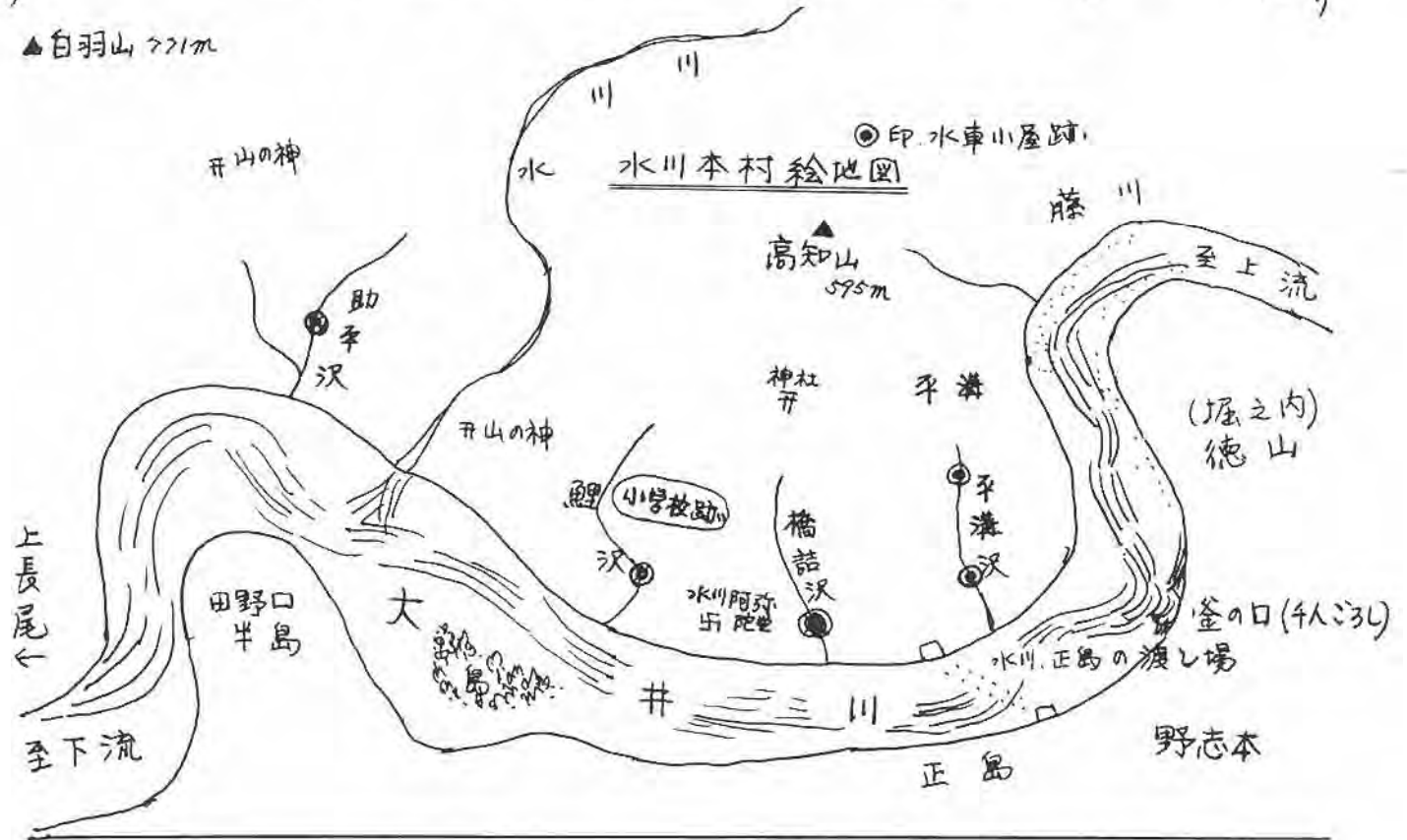
一度につける穀物の量は大体七分ぐらい、大麦を搗く時には、少し水を加え、臼の中で穀物の回転を良くする様に、藤の蔓で作った輪を入れている。

又昭和の時、代も電灯の引けない遠隔地には、水車で発電していた所もあった。水車といえ、ほとんどが人家と離れた木立の中にあつて、昼も夜も、きしむ音がもの悲しく聞こえ、暗い感じの思い出が多い。

今考えても、このような水車は、意外と強い動力をもっている。これが今、発電、揚水などに利用出来ないものかと思う。



▲白羽山 771m



## 二、尾呂久保について

尾呂久保は白羽山の北方で六五メートルの高地ですから、村中に水車があったか否か？と土屋儀太郎さんに聞いてみたところ、すべい谷えが返って来ましたが、どのうちにも水車があったよ。尾呂久保には、何本かの沢があり、沢水を戸々三戸の水車で流し下るのだそうです。

土屋さんと鈴木さんは、入口の柳沢に、別の家は別の沢を活用していたそうです。いずれも急な沢すじですから、少しの平地に水車小屋があったそうです。尾呂久保には、八軒位の家数がありましたから、母屋はなれ、倉庫、作業小屋、そして水車小屋と高い所からながめたら、山の小屋と見えたでしょう。

## 三、長野について

長野の水車について山田栄一さんに聞いてみたところ、大変な話に発展してしまいました。それは、長尾川の上流部は、木材生産がさかんなところで、明治、大正、昭和初期には、林業従事者、山林労務者、その家族が住みついて、にぎやかだったという事でした。

木を伐採する人々、椎茸ほひ樽木生産、炭燧すす現地挽きも行われ、製材所もあり、動力に水車を使っていた、そうです。水車は、長尾川上流本谷付近に設置されていたとの事でした。鉄砲てつぱうだし、(川狩り)、木馬道まばみちもあり、集材された木材は、川と陸と両方で、下流の一番だしに集まったという事です。もちろん、長野地区にも水車はあったと言っています。各家庭ごとではなく、共同、あるいは、代表者の持ち物だったようです。長野も松尾も標高五ロメートル位の高地ですから、沢すじ、谷すじの開けた場所にあったと思われれます。

以上、水川の水車でした。

## 東川根村国民学校の想い出

犬山市 柏井 愛明

私が小学校へ入学したのは、昭和十四年四月のことでした。現在の中国は、その頃支那と呼ばれていて、昭和十二年七月七日、北京郊外の盧溝橋を関東軍が爆破、「中国軍(支那)がやったんだ」と言ったことから、小競いとなり、一発の銃声から、戦火は燎原りょうげんの火の如く、中国全土へと拡大して行った。これが後に、日本がほとんど全世界を相手に、勝ち目のない馬鹿な戦争をする太平洋戦争の導火線になる。

そんな時代背景があって、昭和十六年四月、小学校は、国民学校と改称されました。

昭和十六年十二月八日、ハワイ真珠湾の奇襲攻撃でもはや後に引くに引けない泥沼の太平洋戦争へのめり込んで行ったのです。

先生方は直接「早く大きくなってお国のために死んで来い」とはおっしゃらなかったが、十五歳で志願兵となつて死地に赴く教え子に「死に行くのは止めなさい。お国のためが何んだ。もっと自分の命を大切にしなさい」といなどと言えない空気があり、つらさがあつたのではないでしょう

か。

一年生の担任は、小長井の高木医院の隣りのお家の西井戸正子先生でした。一年生の初めての授業は国語で、先生が一度教科書を読んだ後、「それではあなたも読んで下さい」と私を指差すではありませんか。

私はあがりやすい性格であり、同級生は学校へ入学する前のある程度、お父さんやお母さんに文字を教えて

もらい、簡単な計算ぐらいでできる子が結構いたようです。私は、サイトサイトサクラがサイトと読めず、恥かしさで顔を赤らめ、モジモジしている、「読めなかったら立っていなさい」と早くもリンチです。きれいな顔した先生が、恐いなあと思つたのが、学校の第一印象でした。

校長先生は村越傳とおっしゃって、チヨヒ鬘をはやしたイケ面の大学教授みたいな方でした。先生はこの学校へ赴任して以来、ずいぶん長い間お勤めかと思つたのに、資料によりますと私達の入学と同じ年、昭和十四年四月、東川根へおいでになつたようです。

二年生の時の担任は、はっきりと記憶にありませんが、たつた三ヶ月でも池谷先生をおぼえているから、あるいはそうだったのか。若い男の先生は着任したかと思つたと半年が長くて二年くらいで兵役にとられてしまつたのです。池谷先生は映画スターの佐田啓二ばりの、色は浅黒かつたが、苦み走つたよい男でした。たしか海軍への入団だった。岡部町生まれの増井弥一先生は大変失礼ながら私の記憶になかつたのですが、戦後六十年たつてから奇しくも先生の書かれた御本「原爆と私」のとりもつ縁で、私の伯父大村順平の住んでいた岡部町内谷にお住いだったことがわかりました。東川根小学校では私達より一級幼い、桑野山でいつたら松下和雄君、大村洋子さん、西村さち子さん、後藤さとさんらの担任だったそうです。

水口多美郎校長は、丸顔で背もあまり高くなく、落語家みたいなタイプの先生でした。家は小長井の安江君の家のはす向い、現在の後藤さちさんのお家のところにありましたが、子供さんは女の子が二人。資料によると、昭和十七年から十八年のたつた一年でしたが、何故か記憶に残って

います。下長尾からおいでとは存じなかつた。

焼津市新屋からおいでになつた桜井平三先生については、拙著になる自分史「起承転結」に、そのエピソードを書きまわしたので、ここでは割愛させて頂きます。

その他、資料にお名前が残っている方がいい方、またそこから懐かしい恩師の思い出につながるエピソードの数々、嬉し涙と悲し涙はめぐる走馬燈。中川根ふる里通信への投稿は私ばかりという訳には行きませんが、あとお二方、小田芳雄校長が、奥泉の老人のデーサービスに来ていたよ、と桑野山の松雄兄から聞きました。お会いしたい気持と、「おう柏井あんこのかみか」と、つっても返って来なかつたらどうしよう。と二の足。

私が助眠で野球などの激しい運動を止められ、絵画部に入った時、放課後のスケッチの時間など高田先生がのぞいては、「柏井は派手な色が好きだなあ」とおっしゃつた。また習字の時間には、「柏井の字は平たいんだよ、こんな風に斜から見るとごらん、縦に長く見える。さう、こつやつてもつと横を狭くすると先生より上手に見える」と言つて私をのせました。

焼津のホテルで同窓会があったとき、中井沢久介君のところへ病氣見舞に立寄りますと、奥さんの美智子さんが、「沢間の清水圭子さんを知ってますか」と聞かれました。私が沢間駅に四ヶ月勤務した頃、セーラー服を着て中学校から帰って来る姿が見えました。清水さんは、美智子さんの所へ自転車で遊びにいらつしやるとの事でした。今は昔のスレンドー美人もヒコへやら、相撲協会のお二人です。

西井戸先生は焼津のお住いで、二人で訪ねますと大変喜ばれたそうです。高田先生は藤枝にお住いとのことでしたが、あれからもう十年近い月日が流れましたので、今もって健在か定

かではない。

小学校の低学年の頃は、若くて美しい先生に憧れるもので、やがて興味の対象が運動会などで整列した時、背の高い順に並んだものですから、高木初瀬さん、源間温子さん、森越敏恵さん、背は高くなかったが、足が速く頭が良かった長島京子さんなどの先輩に胸がドキドキ高鳴りました。またお転婆に目もくれないかったのに、思春期を迎えてきれいになった同級生にも目をうはわれたものです。

戦争にまつわる思い出は、大げさだと言われるかも知れませんが、つらい悲しいことはありでした。

お世話になった先生や自分達の家族が赤紙でふるさとを出て行き、あるいは戦場で物言わぬ魂となって千頭駅頭に出迎えるとき。

一日二合五勺の米の配給も、現代の政治家と一緒で空手形のマニェスト。食べるに食なく、配給のキップはあれど下着は買えず、制服や運動靴など何ヶ月に一回、七十人ほどの同級生に對して三三人分しか来ないからクジ引きで、まるで宝くじみたい。はすれた者も、今度いつ幸運が巡ってくるやら……。運動場もある日、半分つぶして、さつまいも、エンドウ豆などの栽培が始まりました。赤土で小石がゴロゴロしていて、しかも土が浅いので、とてもいい野菜はとれない。運動会ができなくなると淋しかったが、腹がへってとてもじゃないか走れなかつたから、ちやうど良かった。

丸い石が山の政道を転げ落ちるように、どうにもとまらなくなつた日本の軍部の転落の道は、昭和二十年へと展開してゆく。

この年、五月二十九日はサイパン島、テニアン島などから飛来したB29爆撃機の数百機からなる大編隊に、たつた一

機の複座戦闘機が、川根本町上空で体当りを敢行。B29一機を撃墜したのでした。最近になってこの戦闘機の所属基地だった愛知県甚目寺町で、この飛行場の跡地をどうするかという問題が持ち上っていることを新聞で知った私は、平成二十二年夏、お節介にも資料に手紙を添えて、実は貴町からB29爆撃機迎撃に飛んで来た、戦闘機の一機が大井川上空でこんな事件があったんですよ、しかしながら私の家は家内が病に倒れまして、介護しておりますので、このことにつきまして、マスコミに私の名前を出されますと、迷惑致しますので念のため、駄目を押ししておきました。すると中心突というの、礼儀知らずと申しました。うか。ハガキ一枚、電話一本来なかつた。愛知県の全てかとは申しませんが、大同小異、煮た餅は雑煮。

とに角あの日、私の一生涯忘れることの出来ない衝撃を心に深く受けた日となりました。た、た一つおかしかったのは、同じ川根本町に住みながら、実際は二十キロ、三十キロとはなれているのに、皆さんそれぞれが「私の頭の真上で……」「僕の頭上で」「私も証言します。左の主翼をもちれた爆撃機は、その翼の燃料タンクからオレンジの焰と黒煙を吐いてくるくると……」そりやそりです。一、二メートルの高さから落下してくるのですから全部正解。ついでに知ったかぶりをつつ、飛行機が一、二メートルの高度に達するには、約四十分ほどかかること。そして空気は地上に較べて非常に薄く三分の一以下となり、水平飛行するには常時機首を上に向けて飛ばないと、高度はほとんど下ってしまうのです。

前述のB29は学校の上の上岸は森平の上の雑木林や民家に落ちて山本さんなど二戸が全焼しました。

学校の奉安殿にはエンジンが一基直撃してプロペラが曲が  
ていました。

おわり

※大変な小学校時代でしたね。文中実名が使用されている事が  
気がかりですが、寄稿文ですので載せました。

※川根本町になって早六年になります。ふる里通信も日本川根  
町の記事は、歴史・学校・地域の情報にとほしく、広範囲のことも  
あって、発信が少ないことも事実です。今回柏井さんが寄せてくれ  
た東川根小学校も、懐しんで見て下さる方も多いと思っております。

※昭和20年5月29日の記録につきまして、白米の英霊を追悼  
する会「故松下麟一氏編集」が、大井川上空における「散華」  
の冊子が発行されて早三三年がすぎました。よくぞ調べてお  
いて下さったと頭が下がります。記録という力の尊さを、このこ  
ろしみじみ感じる次第です。

※太平洋戦争末期、硫黄島が陥落するやいなや、本土空襲は  
はげしさを増し、空路も富士山を目標に、御前崎を目指し、大井  
川をさかのぼり北緯35度・東経138度地点(川根本町久野脇)  
から、東西に進路ととり、東は関東京浜・西は、政神・中京の主  
要都市を焼きつくした。島田には原子爆弾投下の実験を  
かねた模擬爆弾も投下され、大型爆弾の威力のすさまじさを  
知った。焼夷弾の恐怖を、今一度記してみました。

- 一 本土空襲による被災数一
- 昭和19.11.1 ~ 昭和20.8.
  - 日本本土空襲に罹率した  
B29爆撃機は延17,500機  
投下した爆弾160,000トン  
それによって、  
被災者 9200,000人  
死者 350,000人  
負傷者 420,000人  
全焼家屋 2,210,000戸
  - 東京空襲 20年3月10日1夜  
にして 100,000人の命が奪  
われ、家と失った部民は  
1,000,000人
  - 20年5月29日は、横浜空襲  
の為の上空返り戦。  
B29 517機  
P51 100機  
9時15分から侵入  
撃墜した機はB29#4894号  
2回目の横浜空襲に向かう  
途中だったという。  
焼夷弾の重さは3,200トン  
市の書きを焼きつくし死者4,616人  
負傷者14,000人  
一億人の昭和史より

# とうきょう川根の会



埼玉県八潮市大瀬 1527-1 西村榮司 方  
〒340-0822 Tel / Fax 048-997-1911  
rmail emkawane@ybb.ne.jp

どうきょう川根の会に  
入ってみませんか

関東にお住いの皆様、とうきょう川根の会の仲間になって、川根弁で  
心とわちあいましょう。興味のある方は、会長西村榮司さんまで。  
ご連絡下さい。第27回総会は6月19日(日)、会員同志の交流や、ふる里  
川根本町との連携、「森林の市」の手伝いなどもしています。おさそいあってどうぞ。

\*\*\* 定期購読のお願い \*\*\*

ふる里通信は有料発行です。  
1部送料と200円  
皆様の定期購読がこの通信の発行をささえます。年間4回の発行を目指しております。そして目標は100号です。

はじめて読まれる方や購読が切れた方には郵便振替用紙と同封します。会員になっていただいたり引き続きご覧いただければ嬉しいです。

1回1回のご送金は大変ですから1年分800円をご利用下さい。よろしくお願い致します。

発行責任者 〒428-0313  
静岡県榛原郡川根本町上長尾859-6  
小澤節子

TEL 0547-56-0015  
FAX 0547-56-0020  
郵便振替口座 00870-4-81556  
ホームページ(創刊より古い頃に掲載) ウラミスザウロ

http://furusatotsushin.yamanoha.com/



去年の暑さは、ことのほか厳しく、記録的な温度がくり返され、本当に大変な夏でした。それも十月頃まで続きました。が、急に寒くなつて、十二月頃になるとあの暑い夏をわすれてしまいました。そして、雪が降り、こちらにも、記録にはないほどの積雪となり、雪国とはいえない生活が大変になりました。これには、季節風というか、夏の太平洋高気圧、冬の西高東低の気圧配置が大きくかわっているのです。昨夏は、ことのほか太平洋高気圧の勢力が強く、冬はシベリヤ高気圧が強かったのです。こちらは、冬場雨が少なく、寒く、春の来るのもおそかった。でも、おそ味きの桜は、山桜も、里桜もみんな美しく、花も多く見事でした。高郷の長堤のソメイヨシノも素晴らしく、思わず、錦織りなす長堤に、...を口ずさんだほど、暗い気持ちも明るくしてくれました。



東日本大地震には本当に驚きました。予想外の大地震と言いますが、東北地方の太平洋側はリアス式海岸だから地震、津波、大地震、大津波の教訓はいきとどいていたのでしょうか。何かの前衛現象はなかったのでしょうか。大陸移動説、海洋海底拡大説が叫ばれて、五十年前、今ではプレートテクトニクスの学説が当り前となり、地震発生メカニズムも判つて来ました。そして、東海地震説が論じあうようになりました。次回号では、過去の地震の記録を集めて、一五〇年周期の地震のデータや、外の自然環境の変化もお知らせしたいと思えます。

21・22年度と、大井川の清流を守る研究協議会の依頼で、大井川流域の小學生に、大井川の話をしていっています。各年七、八枚の社会や総合学習の授業の先生です。教材は六十年前と現在の大井川のわかる絵地図が主です。大井川の現在の流れは、六十年前と違っていることを知ってもらう事が目的です。現在の大井川の水は、全て管理され、多目的に活用されている事、それによって、様々な自然環境が変化している事を判つてもらおう事です。子供達は目を輝かせて、いろいろな質問をします。私答えます。一番驚く事は、大井川の水の流れが川面ではなく、百キロメートル以上の導水管の中を流れること...。そして、発電所の云々、私言います。「電気は魔法だからね、使いますぎないでね」と節電を訴え、「こゝろに水を使う国はないんだよ。飲む水もない国があるからね」。これには子供達がびっくりして、家庭に持ち帰ってくれます。日本國中、節電、きつと来ますよ。さしずめ、自動販売機は中止して、お店で買ってもらう事。夜の明かりは最小限に、この二つは、日本だけがやっていることだから、外国並みになるだけですね。